

「風向きは」住民疑問

愛媛新聞2016.11.12

県原子力防災訓練

複合災害具体想定を

四国電力伊方原発（伊方町）での重大事故を想定した県原子力防災訓練が実施された11日、参加した伊方町など原発30km圏の住民は放射性物質の拡散を左右する風向や、陸路寸断などの複合災害についてより具体的に想定する必要性を訴えた。

（1面参照）



松山海上保安部の巡視船を使った海路避難で、津久見港に到着した伊方町三崎地域の住民。11日午前11時55分ごろ、大分県津久見市撮影・藤中剛

「（事故の）想定に風向きが入っていない」。バスで松前町役場に移動した伊方町伊方域、農業門田元さん（64）は「避難ルートの選定に一番大事。説明してもらえれば、自主的な避難（の判断）にも生かせる」と強調した。

伊予港までの海路避難に取り組んだ伊方町大久、無職福岡十四男さん（69）は「がっかりだった」と振り返る。「（事故を起こした）伊方原発（の前）を横切った行ったことに加え、瀬戸地域は西風が多く、風下側に避難するのは合点がいけない」と首をひねる。

避難経路は確保できるのか。伊方町瀬戸地域からの海路避難に参加した同町川之浜、農業加藤重雄さん（66）は自宅から三机港までの距離が約7+あったとし「災害時に道路が崩落した

伊方原発 再稼働問題

ら、高齢者らは何+も掛けらるだろうか+疑問を抱き、高齢者らが地元で身を守るための放射線防護施設の一層の整備を課題に挙げていた。

西予市三崎地域から原発30+圏外にバスで避難した周木地区の自主防災会の会長 嶋川武吉さん（66）も本当に事故が起きればスムーズに避難できないんじゃないか。洪滞や崖崩れなどが予想され課題が多すぎる」と顔をしかめた。

松山市に移動した大洲市五郎、農林業大岡健治さん（69）は行政の指示に従い段階的に避難する国の方針に「通信手段が途絶したり停電でテレビが見られなくなったりして指示が届かない恐れがある。」（東班）

（京電力）福島（第1原発事故）では困った人がいっぱいいた」との懸念を口にしていた。

フェリーで大分市の佐賀関港に向かった伊方町大佐田の60代の女性は、大分県の自治体職員による避難の受け入れ態勢を「非常に丁寧で、ありがたかった」とする一方、長期間、避難生活を送らなくてはならなくなったとき、大分県民の理解は得られるのだろうか」と不安を募らせた。

三机港からフェリーに乗りに込む訓練に取り組んだ瀬戸中学校3年、木嶋司さん（14）は「綿密な計画が立てられていたので、安心して避難できた」とほっとした様子。ただ「実際に事故が起きた際、学校にいれば先生が指示してくれるが、1人のおときには混乱すると思う。訓練を思い出し自分たちで考えて行動しないといけない」と気を引き締めていた。

（伊方原発再稼働問題取材班）